六・「栄広山清浄院寺記」にみる古代から中世の越谷とその考察

舩岳　知康

1．まえがき

著者は岩井茂氏である。『寺記』刊行にあたりのところで、清浄院の現ご住職（第二九世）は、岩井氏について、良雄上人（第二六世）の代より五十年近くにわたり当山の事跡を調べてこられた東武地方史研究の第一人者であると述べられている。

氏は『清浄院寺記』を記すにあたり、檀家の皆さんがこの土地周辺にはいったい何年ぐらい昔から人が住んでいたのかという疑問を持たれるかもしれないと考え、まずその点から書き起こすことにしたいと述べられている。

氏の考えに基づき、目次は一～八章に別れ、『一、当寺周辺の古代史、　二、平安時代、　三、鎌倉時代、　四、室町時代（南北朝時代）、　五、室町時代（中期）、六、室町時代（戦国期）、　七、江戸時代、　八、近代・現代』で構成されている。

更に章末には、必要に応じて「清浄院に係わる記事」を掲載している。掲載されている記事は、次の通りである。（）内は寺記の頁を表す。

①三　鎌倉時代、■清浄院と新方氏の関係（38頁）
②五　室町時代・中期、■「六ケ村由緒著聞書」の解説（53～60頁）
③六　室町時代・戦国期、■藤原様（新方様）とは（73～74頁）
（補足 ↓ 藤原様のお堂について）
④七　江戸時代、■「元禄八年大松清浄院等開山並び由緒書」の解説（97～100頁）

氏の著した『寺記』の中に出てくる次の事項について考察した事を述べさせて頂きます。（）内は本文の章を表す。

①三　鎌倉時代、▼式部大夫重清とは誰か（2章）
②三　鎌倉時代、▼新方氏（頼員）とは誰か（3章）
③五　室町時代（中期）、▼新方氏（頼基）とは誰か（4章）
▼武州太田主とは誰を指すか（4章）
▼国名府源三郎紀綱とは誰か（4章）
④五　室町（中期）、▼八条の領主は何故新方を侵略したか（5章）
⑤六　室町（戦国期）、▼藤原様（新方様）のお堂について（6章）
⑥七　江戸時代、▼開山塚（藤原塚）について（7章）

2．鎌倉時代、▼式部大夫重清とは誰か

⑴▼（寺記29頁から引用）▲

一二一三年（建保一年）五月三日、鎌倉中は大騒動になり、侍所別当（長官）和田義盛が敗死、多くの著名武士が討死、没落した。ここに北条氏の執権体制は確立した。これを史上和田合戦という。

五月一七日、大河戸御厨内の武蔵国埼西郡八条郷（八潮市の大半）の領主山内左衛門尉政宣は、和田合戦で失脚、式部大夫重清が新領主となった。地頭職は元の如く渋江五郎光衡（八条氏の祖）に安堵された。

◆1213年　84代 順徳、建暦三年5月17日吾妻鏡

先次郎左衛門尉政宣の所領である武蔵国大河戸御厨の中の八條郷を式部大夫重清に与えた。但し地頭の渋江五郎光衡は従来の通り安堵するとの仰せがあり、相模守（北条義時）と大官令大江廣元がこれを差配した。

（補足）先次郎政宣：確証は得られないが、土肥遠平（どひとうひら）の息子惟平（維平、これひら）が山内荘地頭に任じて山内先次郎政宣を名乗っていた可能性が認められる。

土肥氏と小早川氏は土屋氏（始祖は土屋宗遠）の同族として和田義盛に味方し滅亡したが、遠平は無関係を貫き通して安芸国(広島県の西部)沼田荘を安堵された。

（補足）大河土御厨：現在の松伏町と越谷市にまたがる古利根川の流域で、北側を下河邊荘（下河辺荘）に接している。

元々は源氏相伝の所領だが平家が押領していたらしい。

中川沿いに現在も八條の地名が残り、少し南の淵江（ふちえ、足立区）は渋江の転化らしい。

◆葛西式部大夫重清が領主になったと書いている資料もあるが、年代に開きがある。奥州寺池（てらいけ）葛西氏の系統に葛西高清重清なるものがいるが、生没年が（1313～1365）年で、百年の開きがある。よって、該当しないと考える。

⑵（式部大夫重清とは）

・式部大夫の後に名前（名字が無い）しか記されていない。

・普通は、「駿河式部大夫三浦家村」の様に記す。

・上記の事から、鎌倉幕府に近い人物（御家人）で、幕府中枢にも名前の通った人物か、名前を隠す理由があったものと思われる。

⑶★【結論】その人物を特定することはできなかったが、候補者としては、年代的に適合する所から、一人は三浦家村、もう一人は畠山重清（長野三郎重清）と推測する。

①三浦家村

・三浦家村は三浦義村の四男である。

・三浦義村の生没年は、１１６８～１２３９年である。
・三浦義村は、鎌倉時代初期の相模国の武将。鎌倉幕府の有力御家人。
桓武平氏良文（よしふみ）流三浦氏の当主・三浦義澄の次男（嫡男）。
②畠山重清（長野三郎重清）
・重清は畠山重忠の弟である。
・重清は平氏討伐にも名を連ねている。
・畠山重能（しげよし、重能の男子が重忠・重清）の妻は、三浦義明の娘である。また、三浦義明の男子に三浦義澄、三浦義澄の男子に大河戸重澄がいる。
・長野重清は、畠山庄司重能の三男。通称は三郎。「中乃三郎」とも。兄・重忠に随って各地を転戦。奥州藤原氏との戦いにも従軍した。そして、元久２（１２０５）年６月２２日の二俣川の戦い（現横浜市）で兄・重忠が討たれた際には信濃国の畠山家領の管理に出向いていて難を逃れている。
（補足）「桓武平氏諸流系図」によると、重清は「被誅重忠之後」に自殺に追い込まれている。しかし、弟の畠山六郎重宗は奥州にいたと「吾妻鏡」に記されているが、重清は重忠誅殺に連座した注記は見られないので、生き延びた可能性も否定できない。
（補足の出典）柿生文化を読むシリーズ「鶴見川流域の中世」稲毛庄の定説を見直す　～稲毛庄と畠山氏の関わり

3. 室町時代（中期）、▼新方氏（頼員）とは誰か

⑴ **▼（寺記５３頁から引用）▲**
「その先祖千葉氏の余裔、新方大領頼員（よりかず）は源義家朝臣の催促に応じ奥州にて戦功多し」の部分について

⑵ **（新方頼員とは）**
・「前太平記・前九年の役」によると、新方次郎頼貞の名がみられるが、頼員（よりかず）ではない。
・清原武則（たけのり）は出羽（現在の山形県と秋田県）の豪族で、新方次郎頼貞は清原武則の弟である。

⑶ ★**【結論】**新方頼員は、前九年の役（１０５１～１０６２年）の時代には実在していないと推測する。
・新方頼員が実在しているなら、１４世紀以降の人物と考える。
理由は、新方の初見は１３０５（嘉元３）年である。

4. 室町時代（中期）、▼国名府源三郎紀綱とは誰か

⑴ **▼（寺記４７頁から引用）▲**

「六ケ村栄広山由緒著聞書」によれば、一四一四年（応永二一年）春に葛飾郡新方地頭職、向畑城主新方玄蕃丞頼基（よりもと）を大檀那として一山仏客僧坊を造営する処、開山賢真大和尚（その姓、源頼政一七代の武州太田主、国名府源三郎紀綱一男なり）としているが、当時太田荘は関東公方の直轄領で国名府等の人物は見当たらない。

（補足）

① 「葛飾郡新方地頭職、向畑城主新方玄蕃丞頼基を大檀那として」について、六カ村栄広山伝説（２６９～２７２頁）には、「人皇（神武天皇以後の天皇）百二代新方地頭職向畑城主新方玄蕃丞平頼基大檀那とし」との記載がある。

玄蕃丞（げんばのじょう）は、宗教的な役割を果たしていた。

僧尼の名籍管理　→　僧侶や尼僧の名簿を管理し、度縁（どえん）や戒牒（かいちょう）の発行を行った。

② 一男（いちなん）は、「①一人の男の子、②長男」の見方。

賢真上人を、「①国名府源三郎紀綱と解する、②国名府源三郎紀綱の長男と解する」の二つの見方がある。

③ 第四代鎌倉公方は、足利持氏（１４０９～１４３９年在職）

⑵ ▼（寺記５５頁から引用）▲

開山賢真上人、「その姓源頼政一七代武州太田主、国名府源三郎紀綱の一男なり」と記しているが、当時の武州太田（宮代町国納）の領主にこのような人はいないので誤りである。

⑶ 下河辺庄の支配者の変遷

① 「吾妻鏡」治承４（１１８０）年５月１０日条には「下河辺庄司行平」と見え、これ以前、下河辺荘が成立していたことがわかる。

② 文治２（１１８６）年２月日付関東知行国乃貢（年貢）未済荘々注文（吾妻鏡文治２年３月１２日条）および文治４（１１８８）年５月１２日付後白河法皇院宣（吾妻鏡文治４年６月４日条）に「八条院領」と記されており、鳥羽院皇女八条院に伝えられている。

③ 開発領主である下河辺氏は承久の乱（１２２１年）を契機として、下河辺氏は北条氏の被官（ひかん）となり、下河辺庄の支配も北条氏に移っていった。

④ 鎌倉後期、皇室を本家、称名寺（山号は金沢山）を領家として、地頭金沢氏（金沢流北条氏）一族が当荘を支配していた。

⑤ 元弘３（１３３３）年、鎌倉幕府が崩壊すると、称名寺の所領も建武政府（後醍醐天皇の親政）に没収されたが、後醍醐天皇の勅願寺という理由からすべての寺領が安堵された。また、金沢氏の地頭職は分化された。

しかし、当荘の地頭職は大部分が足利氏に移った。

⑥ 観応年間（１３５０～５１年）のものと思われる小山氏所領注文案に「下河辺[付新方]」とあり、小山氏が関係していたことがわかる。

（出典）・小山文書・神奈川県史資料編３

・小山氏の盛衰・下野名門武士団の一族史・１０６頁

（補足）「所領注文案」とは、中世日本における土地所有に関する文書の一つです。具体的には、所領とは地主や領主が私有する土地の総称であり、注文案はその土地の詳細なリストや状況を記載したものです。

⑷ **【結論・その１】**平頼基は、新方頼基のことである。

頼員（よりかず）、頼基（よりもと）と名付けられる実例は多い。

実例としては、四条氏の親子（頼員・頼基）、その他の氏にも見られる。

前述した小山氏所領注文案から、新方氏は藤原秀郷の流れを汲む大河戸氏の末裔ではないかと推測する。

新方頼員は１３５０年以降の人物ではないかと推測する。

新方頼基については、寺記４７頁にある応永２１（１４１４）年に新方庄の地頭職であったことは肯定できる。

開山は賢真上人であるが、開山時期は、新方が小山氏の所領となった１３５０年以降と推測する。

⑸ **《武州太田主とは》**

・武州太田主は、日本の氏族であり清和源氏　頼光流に属していました。彼らは戦国時代に上杉氏に仕えた一族で、特に太田道灌が有名です。摂津源氏の流れをくみ、源頼光の玄孫（やしゃご）頼政（源三位頼政）の末子（ばっし）である源広綱を祖とする。

・武州太田主（岩槻系太田氏）

太田資忠（＊＊～１４７９年）、太田資家（＊＊～１５２２年）

太田資頼（１４８４～１５３６年）

太田資正（太田三楽斎、１５２２～１５９１年）

太田資武（別名・源三郎、１５７０～１６４３年）

・武州太田主（江戸系太田氏）

太田資康（１４７６～１５１３年）、太田資高（１４９８～１５４７年）

太田資行（別名・源三郎、１４８６～１５７４年）

⑹ **★【結論・その２】**武州太田主とは、通常は岩槻系太田氏を言うが、武州太田庄の太田氏（秀郷流藤原氏の太田氏）も、意に留めておく必要がある。

⑺（国名府源三郎紀綱とは）

◆「国名府（こくなふ）」と読んだ場合は、名府（なふ）は呉音で（のう）と発音するので、国納（こくのう）を連想する。

・南埼玉郡宮代町国納が想起されるが、国納村と認められるのは安土桃山時代（1590年頃）であるので該当しない。

◆「国名府（こくめいふ）」と読んだ場合は、次の様なことが考えられる。

（補足） 名府（めいふ）と読む例　↓　大名符（だいめいふ）

・国名府は、日本の歴史的な行政区分で、令制国を総称する呼称として使われた。

国庁や国衙と呼ばれる行政機関がある場所を国府と呼び、国名府はその周囲に広がる計画的な都市を示す。

（出典）「copilot、生成ＡＩツール」

・武蔵国は、当時21郡を有する日本一の大国で、国内統治上、国府の外に支庁である別府を置く必要があり、熊谷と越谷に置かれたとされ、ここから別府の地名がおこった。《埼玉県史・熊谷市史》

（出典） 読書室・熊谷デジタルミュージアム

⑻ ★【結論・その3】 寺記にある『その姓、源頼政一七代の武州太田主、国名府源三郎紀綱一男なり』は、次の二つの解釈ができる。

① 『武州太田主』が場所を表し、『国名府源三郎紀綱』が名前を表す。
『国名府源三郎紀綱』は、「国名府・源三郎・紀綱」と解釈できる。

② 『武州太田主、国名府』が場所を表し、『源三郎紀綱』が名前を表す。
『源三郎紀綱』は、「源・三郎・紀綱」と解釈できる。

源広綱（源頼政の末子）の子孫は、『綱』を通字（とおりじ）としている。尚、『国名府源三郎紀綱』の実在を裏付けるものは不明だが、賢真大和尚が由緒ある氏を出自としていることは推測できる。

5．室町時代（中期）、▼八条の領主は何故新方を侵略したか

⑴ ▼（寺記57頁から引用）▲

一五〇四年（文亀四年）正月、八条の領主八条兵衛尉平維茂（これもち）は兵を率いて新方の地を侵略せんとして小林郷（東越谷）に攻め寄せ、新方領主の新方次郎太夫頼希（よりき）と対陣した。

数日の間挑み戦った後、三〇日に頼希は八条方を急襲し追い崩したが、深入りして敵方の流れ矢に当たり落命したため、新方勢は大敗した。

この結果、向畑の館は八条方別府三郎左衛門が守り、新方郷（六か村）は八条方の領有する所となった。

（補足）

・兵衛尉（ひょうえのじょう）とは、日本古代の律令制のもとで天皇に近侍し、宿衛等の任にあたった者である

・平維茂（たいらのこれもち）は、八条惟茂（これしげ）のことである。

・次郎太夫（じろうだゆう）

新方大領頼員、新方玄蕃丞頼基、新方次郎太夫頼希と、苗字と本名の間の通称の部分が変化している。通称の格が下がった様な印象を持つ。

⑵ **時代背景**

・１４５５（享徳４）年、足利成氏・下総古河を本拠とする
・１４５７（康正３）年、太田道灌、江戸城を築く
・１４８６（文明１８）年、扇谷上杉定正が太田道灌を誅殺
・１４８７（文明１９）年、両上杉が衝突　↓　長享の乱
・１５０４（永正１）年、八条方より新方を攻める
・１５０５（永正２）年、長享の乱終結
・１５１６（永正１３）年、北条早雲、相模を平定

（長享の乱）　山内上杉家の上杉顕定（関東管領）と扇谷上杉家の上杉定正（没後は甥・朝良）の間で行われた戦いの総称。

⑶ ★**【結論】**八条（武蔵国埼玉郡）が新方（下総国葛飾郡）を攻めたのは、長享の乱が引き金となって起きた侵略の戦であったと推測する。

また、新方の土地の支配者は次々に代わり、１３８１年に小山氏の滅亡により、その所領は室町将軍家（関東公方）の所領となった。

一方、八条郷は鎌倉期には渋江氏（八条氏の祖）が地頭の職にあり、室町期には八条郷の地頭は八条氏であった。

この様な両者の違いも、戦の起因になっていると推測する。

6. 室町時代（戦国期）、▼藤原様（新方様）のお堂について

⑴ **▼（寺記７３頁から引用）▲**

越谷市向畑一、一一一番地先の路地を入ると小さなお堂があり、その中に、釈迦を主尊に、観音、大日様を種子の梵字で表した板碑が祀られている。

この板碑はなぜか年号を削除してあるが、形態的に見て室町中期の作であることが分かる。

俗に「藤原様」と呼ばれ、また「新方様」とも呼ばれて、地元の人はじめ多くの人達の尊崇を受け、大正の末までは参拝人が多くて、・・・（後略）

（補足）室町中期とは、１４世紀後半（１３５０年以降）から１５世紀前半（１４５０年以前）を指す。

⑵ ★**【結論】**藤原様とは、新方氏の祖である秀郷流藤原氏であり、新方様とは新方を開発した新方氏（秀郷流藤原氏を祖とする大河戸氏の末裔）であると推測する。

7. 江戸時代、▼開山塚（藤原塚）について

⑴ **▼（寺記９７～１００頁から引用）▲**

・この寺（清浄院）の開山由緒書は、幕府寺社奉行の調査により元禄８（１６９５）年に書き上げたもので、開山賢真上人は実際には、嘉慶元（１３８７）年に没している。
・現存する板碑は嘉慶２（１３８８）年７月銘となっている。これは上人の一周忌に建てたものと解釈される。
「賢真上人」と刻した板碑としては、宝徳元（１４４９）年７月２８日と刻したものが現存している。
・嘉慶元（１３８７）年より数えて、宝徳元（１４４９）年は６３回忌に当たる。
・この新方は古来、下川辺庄で、「秀郷流藤原氏」の後裔の下川辺氏ともっとも深い関係にある。
新方氏も、幾度も記しているように、下川辺行平と兄弟であった大河戸行方が最初に大河戸氏を名乗り、その末裔がこの新方を開発、新方氏を名乗った。
・応永２１（１４１４）年春は、賢真上人没後の２７回忌に当たり、新方頼基が清浄院を中興した年とするのが妥当であろう。
・結論として、清浄院の寺としての本来の開基開山は１３５０年代（観応年中、１３５０～５２）ではないだろうかと推定される。
（補足）『下川辺行平と兄弟であった大河戸行方（大河戸氏の祖）』における（兄弟）とは、同じ親をもつ兄弟ではなく、先祖が同じという意味です。
⑵ ★**【結論】**開山塚は本来開山上人の賢真上人を供養したものであるが、藤原様とも呼ばれているのは、清浄院の開基にあたり、多大の尽力をした新方氏（秀郷流藤原氏の末裔）への尊崇からと推測する。
⑶ ★**【結論 ⬇ 清浄院の開山時期】**
清浄院の開山時期が、「舩岳が推論した時期（本文５頁）」と「岩井茂氏が寺記に記された時期（寺記45頁）」が、ほぼ一致している。
・舩岳の推測：１３５０～１３８７年（賢真上人死没）ではないかと考える。
・岩井氏の推定：１３５０～１３５２年の観応年間。

８．あとがき

考察不十分な所（考察が飛躍している所）があると思いますが、関係諸兄のご指導・ご鞭撻を賜りたいと存じます。
特に気にしている所は、『２．式部大夫重清とは誰か』です。
長野（畠山）重清が、兄・重忠の死後、どの様に幕府（北条氏）に奉公したかが不明な為、年代（１２１３年）から可能性を頼りに推測しました。
この点は、歴史研究の進め方にマッチしませんが、三浦家と畠山家は三浦義明の娘が畠山重能（しげよし、重忠の父）の妻である関係もあり、長野重清は三浦氏の保護下で生き延びた可能性があると推測しました。